

おごれんの青春日記

その3



新春初夢の園

田中賢司

新年あけましておめでとうございます。

年賀のごあいさつにかえて、「おじさんの青春日記 その3」をお届けいたします。昨年 は経済情勢の相次ぐ変動に見舞われ、お約束した連載『合衆国陸軍軍曹マスタカズオ ミラノの魂柱』の執筆が中途のまま、年末を迎えてしまいました。多くのご激励をいただきながらご期待にそえなかつたことを、深くお詫び申し上げます。

先年ご報告したとおり、「おじさんの青春日記」に所収の『ものを造るということ』が広島市文化財団主催の文芸コンテストに入賞し、平成十年一月、授賞式に出席いたしました。平成元年、「追録 ハリータケオモミタ」で受賞して以来、十年ぶりの応募、受賞となりました。

授賞式で戴いた賞金は、イタリア・アンツィオ市の「アンツィオ上陸記念博物館」に寄付いたしました。（詳細は『おじさんの青春日記 その2』に。）

昨年十一月、同博物館のパトリツィオ・コランツィオーノ館長から、受領した寄付金で「図表百科辞典『ベルサイユ条約から広島・長崎原爆投下まで』全十巻」を博物館の蔵書として購入した旨の報告と、丁寧なお礼状が届きました。

ことし一九九九年一月二二日、アンツィオ市は一九四四年（昭和一九九年）の米連合軍によるイタリア本土上陸五五周年を迎え、米欧から関係者を迎えた記念式典が行なわれます。

連合軍によるイタリア・アンツィオへの初上陸が、翌年のベルリン陥落、日本の敗北へと歴史を刻んだことはご承知のとおりです。

文化財団主催の受賞パーティーでの総合講評のなかで、審査員を務められた広島大学名誉教授、松元寛先生（七四）は、要旨次のようなスピーチをされました。

「本来リーダーたる政治家などに見られる『日本語、言葉の類廃（たいはい）と軽視』がはなはだしい。『言霊（ことたま）』という言葉がすでに死語になりつつあるように、『言葉』が軽い交流の道具に墮しつつある。言葉と人間の行為との乖離（かいり）は目を覆うばかりである。ワープロなどは確かに便利だが、精神の伝達手段ということから考えると、何か大切なものが抜け落ちていくように思う。敗戦後の日本は、戦争犠牲の総括がなされないままに合理、効率の道を進んだ。その途上で、戦前の日本にあった美風は廃（すた）れ、敗戦を境に、悪しき戦前と、戦後の悪しき合理性とがないまぜになって現代がある。」

シエイクスピア文学の権威であられ、鶴のような長身、瘦躯の先生が背筋を真つすぐに伸ばして壇上に立たれ、声ふり絞ってスピーチされた姿がとても印象に残っています。学校を卒業して以来しばらく、先生から叱咤されるといふ経験のない私は、松元先生の鋭いご批評とご激励が、惰眠で肥満した体に染みいるようなショックを感じました。

不況のなかに明け暮れた昨年も、このような得難い体験がありました。

月並みですが、「出会いと実行」が苦境を切り拓いていく基本だと考えています。

今年も、敬愛し、素晴らしい感性をお持ちの方々に、こうして『おじさんの青春日記 その3』をお送り出来たことを感謝いたしております。

ことし一年のご健康をお祈り申し上げます。

一九九九年（平成十一年）元旦

里吉賢司

おじさんの青春日記

その3

一人で酒を飲むときおじさんは、三度に一度は、むかし好きだった人のことを思い出します。

彼女もすでに人妻の身。

追憶が肴の一品になって、ついもう一杯お代わりをしたくなります。

そして、おじさんは遠くを見て、「チクシヨ」とつぶやきます。

むかし、おじさんが惚れていたおばさんは、きょうも子供たちに雷を落としたあと、颯爽とバーゲンへ。

昔のことを想うより、おいしいものがありつけた時の方がよっぽど幸せ、とファミレスで会うおばさん達は言います。

観光地で一番威勢のいいのは、おばさんの団体。高校生の修学旅行がその次だそうです。

そのうちきつと日本は、おばさん達に占拠されるに違いありません。

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、全国の孤独なおじさんに贈る、

「おじさんの青春日記 その3」

書き手

里吉 賢司

おじさんの青春日記〜その3〜

目次

『まえがきにかえて』 清 職

岡ちゃんに捧げる詩^{うた} 2

岡ちゃんに捧げる詩^{うた}

お好み焼き「風月」

おじさんの青春日記 ～その3～

『まえがき』にかえて

			清				
			職				

「おじさんの青春日記」は合間を見つけてワープロに書き蓄えた数行のフレーズを、連休や夏休みのまとまった休日に編集し、推敲（すいこう）する作業のなかで出来上がっていく。

日常の体験や思いを幾種かの引き出しに分別しながら、言葉の森を散策できる、もっとも楽しいひとときでもある。

経済環境の変動に次ぐ変動のなかで、昨年の私の仕事はフーフーと息づかいを荒くしながら、日々発生する事件の後を追って走ることに精一杯だった。

日本列島を北から南。私は大都会のオフィスビルから、田園のなかにポツンとたたずむ工場まで訪ね歩く。そこでさまざまな人との新しい出会いが生まれる。

新規な価値や技術を発想して図面化する仕事。五感と体のすべてを使って物を造り上げる仕事。交渉のなかで生まれる多くの約束事を実行する仕事。

そこには仕事を通じた交流のなかで見ることが出来ない、男たちの姿がある。私は今そのまっただ中にいる。

今回の「おじさんの青春日記 その3」は文芸を離れて、戦後日本の数十年にわたる経済活況が停滞、恐慌に近い現在の状況のなかにいて、いくつかビジネスにまつわるストーリーを書いてみたいと思う。

市井（しせい）に極くありふれた存在で、赫々（かつかく）とした経歴も持たないけれど、自分の職に誇りをもって働く男たち。

きょうより明日、と自分を鼓舞し、虚勢を張らず、権威に迎合することもない。淡々と、自分の歩みを刻々大切に生きようとする人たち。

新聞紙上を賑わす『汚職』者に対して、私はその人達の仕事ぶりを『清職』と呼びたいと思う。

『清職』者は決して寓話（ぐうわ）の世界の人々ではなく、目立ちはないけど、我々の身のまわりに確実に、無数に存在する。

たとえ日本が金融や経済で破綻することがあっても、彼らがいる限り、その精神において日本は破綻しない。

本編に登場する男たちを父や夫に持つ人たちよ。あなた方の父親や夫や兄弟が、その仕事を通じて、少なくとも一人の人間に忘れられることのない感銘を与えたことを知れ。そして、そのあとに続け。

*

父が遺した工場の事業転換に四苦八苦していた私が、二十代の頃のこと。

銀行のS支店長に二百万円の融資を申し込んだことがある。初老のその支店長は噂ではいわゆる出世コースからは外れた存在で、この支店を最後に定年を迎えるだろうとのこと。

応接室でのしばらくの雑談のあと、S支店長は切り出した。

「融資の申込書は拝見しました。ご計画中の製品は確かによく研究された、いい製品だと思います。しかし、販売の見通しの方はどうなんでしょうか？」

「製品には自信があるんです。見てもらった企業の担当者も誉めてくれますし、売り先の方もいま、手をつくして開拓しているところで、二、三の商社から声をかけてもらっています」

私は何枚かの図案をテーブルに広げ、支店長に言葉を返した。

「しかし、まだ注文書を受け取るまでには話は進んでいないわけですね？」

笑みを浮かべながらも、S支店長は鋭く切り込んでくる。

「支店長、新製品というのは市場に出してみないと本当に分からないものなんです。図面やイラストだけでは商売にならないんですよ。実際に試作品をいくつか作って吟味することが必要ですし、それに顧客に渡すサンプルだって相当な数必要なんです」

と、懇願口調の私。

「技術的なことは私には皆目わかりません。しかしどうもこの製品は、開発した方の思い込みばかりが先行しているような感じがするんです。実際にこれらの商品の販売を扱う業界のプロが見て、製品ではなく、流通に乗る『商品』だと認めてもらって初めて、製品は生命を得るんじゃないかと思うんですが、いかがでしょうか？」

二百万円の融資をめぐる二人の議論が続く。

支店長は続ける。

「確かに担保も提供していただければいいのですが、保証人もしっかりしておられる。本店も当支店の融資課長もOKを出しています。」

しかし、私はどうも不安を感じるんです。差し出がましいとお思いかも知れませんが、いくらいい製品でも販売先の見通しが十分でない新製品に我々が安易に融資させていただいで、万一、思惑（おもわく）が外れた時に一番お困りになるのは融資先、つまり貴方です。もう一度資料を持って、販売先を回ってみていただませんか。一社でもいい、製品一つでもいいですから、買ってやろうという会社があれば、お望み通り、今回のご融資を実行させていただきます。」

「支店長、今の時期、特別に金融が引き締まっているわけではないですね。それにこれまでお宅の銀行へご迷惑をおかけしたことは一度も無いはずですよ。私の出来る範囲のご協力はさせてもらっているはずですよ。」

不機嫌な表情に変わっていくのが自分でもわかる。

息子ほどの年令の私にむかって、S支店長は顧客への礼儀を失しないように、言葉を選び答えた。

「ご融資した資金の保全ばかりを考えることが銀行の仕事ではないんです。私たちの仕事は一生懸命事業に携わっておられる会社を、陰で応援させていただくことです。その会社の事業がうまくいったら収益を預金していただくことが出来ます。従業員のボーナスもお預かりできる。そしてまた、必要な資金を融資させていただく、という好循環を作るための、いわば裏方の仕事なんです。融資先の事業が堅実に成長していただくことが私どもの楽しみでもありますし、生きがいでもあるんです。今回の二百万円というお金は決して大きな金額とは思いませんが、たとえ二十万円の案件でも同じことを申し上げると思います。結果は何とも言えませんが、よろしければ私が以前の支店でお取り引き頂いたことがある会社へご同道して、この製品の取り扱いをお願いしてみたいと思います。」

それからしばらくのやり取りのち、しびれを切らした私は、蹴（け）るように応接椅子を立ち、それきりその支店長と話すことはなかった。

なんとか資金を調達した私は、勇躍、その製品の生産にとりかかった。結果は在庫の山であった。商品を誉めてくれた商社の担当者も、いざとなると言を左右にして発注を渋った。日本の複雑な流通機構のなかで、その製品の末端での販売価格は現実を離れたものとなった。

開発者、製造者の一人よがりな思い入れは顧客の支持を得られないまま、幻（まぼろし）と消えた。

その慧眼（けいがん）もさることながら、血気に逸（はや）る私を諫（いさ）め、銀行員としての信念を毅然と語ったS支店長のその時の言葉を、私はその後の仕事の折々に思い起こした。

それから十年ののち。

S支店長の数代のちの支店長が私の部屋を訪れた。

才気と活力が体じゅうにみなぎり、見るからに働き盛りの銀行員としての自信を感じさせる四十代の支店長は滔々（とうとう）と自説を語り、私に土地購入と巨額の借り入れを勧めた。

「日に日に土地の値段が上がっているのはご存じでしょうか。なんととっても平地の少ない島国の日本は、まだまだ土地が不足してるんですよ。」

『土地』ならまず確実ですし、新聞などでも言われているように、来年は少なくとも二十%は値上がりしているでしょう。評論家の先生などは、今に倍になるなんて仰ってますよ。」

「しかし支店長、今はうちの工場にも余裕がありますし、活用する計画がないままに土地を買うのはどうもおかしな話ではないですか？ 農家のように農地さえあれば作物が獲れるという仕事でもないわけですから。世間は財テクとかで騒いでいますが、私は土地取り引きなど素人ですし、将来の目的のはっきりしない何億ものお金を借り入れるなんて恐いですよ。」

その支店長は二度、三度と私の部屋を訪れた。

「資金の方はお任せください。今回おすすめる土地はわずか億ですし、転売などはすべて当行の関連会社が責任をもって手配させていただきます。税金などを差し引いても今なら%の利益になります。失礼ですが、御社の今の事業収益とは比較にならないくらいの額になりますね。」

バブルがすでに絶頂期を過ぎようとしていた頃の、全国いたるところで見られたであろう異様な光景であった。

日本国じゅうにすさまじいポリウームの黄金幻想が出現した。人間の本能的な恐れや故事の教えも麻痺させる、おびただしい量の報道や流言蜚語（りゅうげんひご）に乗って、あらゆる階層を巻き込んだ挙国一致のマネーゲームが展開された。

災禍がアジア、西太平洋諸国にまでおよび、千万の犠牲者と無数の破壊を生んだ太平洋戦争もまた、異を唱える者を国あげて異端、非国民と誹謗（ひぼう）し、一億一心となって猛進したあげく、ついには惨憺たる敗戦を迎えた。

余りにも大きな犠牲を払いながら、
「なぜだったのか？」

という素朴な検証と内省はないがしろにしたまま、人々はその後の加速度的な経済の発展に目を奪われていった。

敗戦の折り、日本国民あげて味わった無力感、将来への暗然とした不安と同種のものを、いまの深刻な社会状況のなかに垣間見ることができると。

時代背景の違いがあるとはいえ、際立って異なる二人の銀行支店長の精神の純度。日々、年々、刻々と重ねられる歴史は、機械的に作られるものではなく、人びとの膨大な量の日常の些細な営みや思いが、朽ちていく落葉のように重なるなかに生まれていくものであることを、今の日本の状況のなかで感じている。

*

「Yさん、きのう、あなたの名前でウチの会社へ 十万円の銀行振込みがあったけど、あれなに？」

「ああ、あれはねえ、以前僕が担当してたお宅との仕事で、お宅の会社からの請求をウチの会社の都合で支払えんかったことがあるでしょ？ あの件の精算なんすよ。」

「ああ、あれかあ。でもあれは、ウチの会社にも責任があることじゃし、担当者と相談して値引きのつもりで請求は放棄して、とうにうちの帳簿からも消しとったんじゃない」

「いやあ、あれは全部僕の不幸際じゃったんよ。お宅とのいきさつを会社の偉いさんにも話して、随分掛けおつてみたんじゃないけど、理解してもらえなかった。まあそれで、今度会社を辞めたのをきっかけに、僕個人のお金をお宅へ振り込んだわけなんよ。受け取つてよお」

「いや、そういうわけにやあいかん。ウチの会社はあんたの会社と取り引きしたわけで、あんた個人と取り引きしとったわけじゃあない。あんたの月給のひと月分以上にもなるようなお金を、担当者のあんた個人から貰うなんて、そりゃあ筋違いじゃ。冗談じゃない」

「まあ、ええじゃない。退職金ももろうたことだし、それで僕の気がすむんだし。お宅に迷惑をかけたまま会社を辞めたら、いつまで経っても前の仕事が終わってないような気になるしねえ。会社辞めたとはいっても、自分のやった仕事にやあ今でも責任があると思うとる。すつきりした気分で、次の仕事を探したいんよ。長い付き合いじゃない、僕の気持ち、わかつてよお」

私と、ある機械商社を辞めた直後のYさんとのやりとりである。

打算と駆け引きが日常交差するビジネスの世界で、このような鳥肌立つような感激を味わうことが出来たのは、私にとって絶後のことである。

彼の思いを預かり、いつか事あればYさんのためにどの手にかけても、と私は強く思った。

彼とのやりとりのあと、私は亡くなった祖母のことを思った。

私の母方の祖母は明治十七年、山口県玖珂（くが）郡に生まれた。祖母の母親、つまり私の曾祖母は江戸期の生まれである。

祖母は武家の血筋をひくことを誇りにし、気位の高い女性であった。アルバムに残る写真を取り出して見ると、背筋を凜（りん）と伸ばし、挑むようにやや斜めに肩をいからせた祖母の短軀を見ることが出来る。

西暦一六〇〇年の関が原の合戦で徳川軍に破れた毛利氏は、それまで百二十万石を誇った中国路の覇者からわずかに三十万石の小禄に減封され、長州（現 山口県）萩の小城に押し込まれた。

主君を慕って萩に付き従ってきた多くの家臣を、三十万石という少ない禄高ではとうてい養うことはできなかった。家臣は武士から商人や農夫に姿を変えて藩内の各地に散ったが、武士の誇りと矜持（きょうじ）は忘れることはなく、その思想を連々と子孫に伝えた。

長州における産業の三白（さんぱく）といわれる、塩、蠟（ろう）、そして紙。公称三十万石という禄高はこれらの特産物をはじめとした殖産のおかげで、長州藩晩期の今というGDPは実質数百万石といわれ、その活力が、幕末、明治維新の世に、徳川幕府に正面から立ち向かう一原動力となつたともいわれている。

祖母は成長ののち、紙作りの商家に嫁いだ。上質紙の原料となる楮（こうぞ）やミツマタを育て、広島県と山口県の県境を流れる小瀬川の豊富な清流で紙を漉（す）いた。

日露戦争に出役し傷痍軍人となった夫をかかえて、馴れない商いで七人の子供を育てた祖母は、常にふんだんな食事を子供たちに与えることを最重要視して、心を砕いた。幼心に「食」に不自由させないことが、単純にして必要な教育手段と考えたのである。

たとえ衣服は粗末であっても、幼時に食が満ち足りてさえおれば、長じたのち、理に反して必要以上のものを専有しようとする邪（よこしま）な考えに陥（おちい）らない。また、自分の持てるものを屈託なく他に与えようとする余裕が育つ。

とりわけ男子に対しては「武士は食わねど高楊子」たることを求め、「男は臍（へそ）とはいわれても、口とはいわれるな」と日常のなかで強く戒（いまし）めた。

臍とは女性関係。女にだらしないと周囲に言われることはあっても、口、すなわち、食、酒、に卑しい男と言われることを激しく嫌悪したのである。

卑しく「ただ酒」を呑むことが権威、権力への媚（こ）びや迎合、まいない（賄賂）の受領につながり、ついには男子の命ともいふべき誇りや職を汚してしまう、という発想である。

飽食の現代と異なり、明治期から大正、昭和期にかけて七人の子供達の食欲を過不足なく充たすことは、並大抵のことではなかったに違いない。

兵役を誉れとする夫に従って、祖母は夫に続いて三人の男子を戦地へ見送り、一人を戦傷によって失っている。

晩年の祖母の表情は昔の苦労などなかったように、いつも駈蕩（たいとう）（たいとう）としてのどかだった。彼女の作る料理は決して華美なものではなかったが、ふんだんな思いのこもった素晴らしい食事だった。

冒頭に紹介した機械商社のYさんは会社を退職したのち、造形の特技を生かして樹脂の成型会社を興した。

清廉（せいれん）で駆け引きのない仕事ぶりから、創業直後から彼の会社を名指しする顧客に支えられて、順調裏に今日に至っている。

体じゅうがユーモアに包まれ、「我欲」のない彼のもとにおのずと良質な情報が集まってくることは言うまでもない。

私の周囲に目を凝らせば、武士（もののふ）の魂にも通じるたたずまいを感じさせる多くの人物がいる。

国家公務員のAさん。大学教員のBさん。会社役員のかさん。議会の議員を務めるDさん。会社員のEさん。音楽家のFさん、

敬愛するこれら友人知人先輩諸氏はその稀に個性的な生き方から、現代社会においてはユニークな少数者と呼ばれる存在なのかも知れない。

しかし私は、彼らが長い試練のなかで養い到（いた）った意思や、拳措（きよそ）の端々に、彼らの体に何代にもわたって受け継がれた伝統的日本の魂を感じることがある。

それは現代の国際社会においても、立派に通用する普遍的な精神であるように思う。

彼らは特別、気負った様子はなく自然体で、口に出して語ることはない理想を夢見ながら、悠々と人生を楽しもうとしているように見える。

彼らのような人物が日本の社会層のなかで有効に存在し、精神を周囲に伝える限り、日本は将来にわたって、少なくともこのたびの不況程度で微動もすることはないと思っている。

了

岡ちゃんに捧げる詩

うた

その2

真夏のある早朝。出張前の広島駅新幹線構内の店でコーヒを飲んでいた私に、カウンターのむこうからしきりに手を振る中年の男性がいる。岡ちゃんだった。

二人とも東西に別れる乗車前のあわただしい遭遇だったが、いつも底抜けに明るく、会う人みなに元気を配って歩くような岡ちゃんの表情に精気が失せていたことが、電車のなかでも気がかりだった。

それから二ヶ月後の九月二日、「岡ちゃん」こと、岡賢治氏急死の報が届いた。呼吸器系まで転移したリンパガンによる死であった。

通夜、葬儀に集まった人たちの間から、あちこちで『岡ちゃん、岡ちゃん』と、彼の愛称が聞かれた。

一九九六年（平成八年）執筆し、翌年正月の『おじさんの青春日記』に掲載した『岡ちゃんに捧げる詩』を贈呈したとき彼は、

「わしの人生が文章になって、活字になって、見ず知らずの人達にも読んでもらえるなんて夢のようじゃ。ホンマにありがとう。一生の宝にします。」
と、本を押し戴くように両手で高く掲げた。

岡ちゃんとの出会いは、盛場の一軒のスナックだった。

初めて姿を見かけて何度か目にカウンターの隣同志となり、いつの間にかすっかり意気投合してしまった。

岡ちゃんは接待の相手を退屈させないように細かく気を配りながら、酒も飲めないのにマイクを片手に歌い、話し、店じゅうあげての爆笑を何度も呼び起こした。トイレから出てきた岡ちゃんが、頭から体じゅうにかけてトイレトーパーを巻き、マッチの軸を燃やして作った炭で化粧をして、

「透明人間じゃあーっ」

といつて半裸で店じゅうを走り回る即興芸に、私たちは腹をかかえて笑った。

時が来ると、素面（しらふ）の岡ちゃんはさつと真顔になり、

「屁（へ）の五番！」

と電話口でわめいて、台風が去るように店から出ていった。

岡ちゃんの野辺の送りに集まった人との語らいは、悲しくてならないのに、いつか笑いがこみあげ、そしてまた再び悲しさが深くなるものだった。

二年前、岡ちゃんに贈った『岡ちゃんに捧げる詩』が、岡ちゃんと同僚の人たちの徹夜の作業によって立派なコピー冊子に調製され、全国各地から駆けつけた葬儀の参列者に配布された。

私はやりきれない思いで、読経のあいだじゅうそれを読み返した。

みずから営業の仕事を「天職」と語り、同僚や取引先をして『岡の前に人なし、岡のあとに人なし』と言わせた彼の技量と人柄は、若い頃からの辛苦の底から這い上がるなかで体得したものだった。

岡ちゃんは私に郵送してくれた「自分づくり 自己啓発」と題したメモのなかに、このような言葉を残している。

- 一 人よりほんの少しの努力をしよう。人間のもつ能力の差は小さい。しかし、社会での努力の差は大きい。
- 二 もつ駄目かな、と思つたら、この方法は、あの方法は、と動いてみる。
- 三 人のせいにしない。他人に責任を転嫁したり、他人の批判をして
いる時は、自分が弱っている時。
- 四 理屈を言う前に行動から。『不可能ですな』と一笑するな。
『出来るだろうか』と戸惑うな。すぐ、実行してみる。
- 五 意気を感じて頑張ろう。社会のために、国のために、会社のために、
個人のために、仕事のために、愛する人のために、お客様のために、
自分のために。

広島市遺族会が終戦五十周年記念誌として発行した『隆想』のなかに、岡ちゃんは手記を寄せている。

戦地での父親の死因に疑義を唱え、困窮の極みにあつた岡家への遺族年金の支給を拒否し続けた厚生省に対して、

「戦地で壮烈な戦いで死んでも、戦艦とともに海の藻屑（もくず）となつても、原爆で一瞬に消えても、それらの死にどうして差をつける必要があるのだろうか」と語り、二人の幼児を抱えて、二十八歳で未亡人となつたお母さんへの感謝と思慕を連綿と綴っている。

岡ちゃんは太平洋戦争のさなかに生まれ、父親亡きあとの家庭でお兄さんと共に必死で母親を支えた。

日本国の壊滅と、彼自身も加わつた国の復興、その後の繁栄を全身で体験し、享年五十七歳で台風のように我々の前から去つた。

平成元年五月、岡ちゃんが顧客である山九株式会社社員を前に行なつた講演、「大企業のなかの小機種営業マンの戦い」の講演原稿一冊が、岡ちゃんの私への形見となつた。

それは自分の恥部をも隠すことなく克明に綴られ、後進の者たちに勇気と生きる喜びを預託しようとする、岡ちゃん渾身（こんしん）の叙事詩であつた。

岡ちゃんに出会えたことを生涯の歡びに思い、ここに再び『岡ちゃんに捧げる詩』を掲載して、故人のご冥福をお祈りしたいと思う。

岡ちゃん。ありがとう。

おじさんの青春日記 くその3く

岡ちゃんに捧げる詩

うた

追悼改訂版

岡ちゃんは一滴もお酒が飲めません。それなのに、毎晩のようにどこかの酒場で「北国の春」を歌う岡ちゃんの姿を見ることができません。

くたびれた皮のトランク、よれよれのレインコートを盛り場の要所要所に隠して、接待のお客さんを前に千昌夫の扮装で「北国の春」を歌うのです。

岡ちゃんの仕事は、大型クレーンメーカーの営業マン。潮風に鍛えられて赤銅色に日焼けした世界中の海の男たちが、岡ちゃんの大切なお客さまです。

その昔、大阪のお得意先に納めたクレーンが故障して、現地に部品がなくて困っている話を聞いた岡ちゃんは、その足で上司の許可もとらず、三百キロの深夜の道のりを部品を抱えてタクシーをぶっ飛ばしました。

あとで上役にはこっぴどく叱られたそうですが、修理が済んで、機械が再び息を吹き返して動き始めた時のお客さんの笑顔を見るのは、そりゃあ、たまらなく嬉しいものだそうです。

「困ったときは会議をせず、まずお客さんのところへ行く」ことが岡ちゃんのモットーなのです。もとより、上司の顔をうかがって出世してやるうなどという気は、岡ちゃんにはこれっぽっちもありません。

とっさの判断が必要な非常の時、マニュアルにない事件の対応で皆が頭を抱えている時、真っ先に体が動くのが岡ちゃんです。

大阪の件以来、岡ちゃんの深夜の長旅のお供をしたカープタクシーの運転手さんのあいだで、岡ちゃんの心意気は大評判。

岡ちゃんを頼って世界中から訪ねてくるお客さんは、岡ちゃんが同乗するタクシーのなかの、春風のような心地よさに異国の疲れを忘れます。

タクシーを呼ぶ暗号は、カラオケの曲番からつけた「屁（へ）の五番」。

広島全域に散る百三十台ものカープタクシーが、岡ちゃんの声と「への五番」の合言葉を聞き分け、どこへでも最優先で駆けつけます。

太平洋戦争開戦の年、生まれたばかりの岡ちゃんは、翌年、お父さんを戦争で失いました。もちろん、お父さんの顔は覚えていません。

陸軍伍長としてフィリピン、台湾を転戦のち戦死したお父さんの死因、「マラリアによる肺炎」が遺族年金の受給条件に該当しないという理由だけで、厚生省は戦後も遺族年金の支給を拒否し続けたそうです。

戦争犠牲者をなおも峻別（しゅんべつ）しようとした国の冷たさを、岡ちゃんはいまも憤っています。

昭和十九年、一家はお母さんの里に疎開。当時五才だったお兄さんと、乳呑み児だった岡ちゃんを、お母さんは和裁と洋裁の内職で育てあげました。

三日間徹夜で内職のミシンを踏み続け、指先を縫い針で縫ったまま悲鳴とともに気を失ったお母さんの姿を、岡ちゃんは一生忘れないといいます。

お母さんの生命ともいうべきミシンが、質屋のノレンに消えていったこともあります。奨学金を得て高校を卒業した岡ちゃんは、念願の大企業、三菱重工広島造船所へ入社しました。

入社といっても日給制の臨時工員扱いです。体を動かしてお金をもらえる喜びを、岡ちゃんはこの時初めて体験しました。

就職したのちも夜学で製図の勉強を続けた岡ちゃんは、十三年間の工場勤めのうち、念願の機械営業部に転属になりました。三菱重工が海から陸の構造物へと、経営の重点を変えつつある時代でもありました。

工場の送別会の時に現場のみんなにはなむけに貰った、バーバリーの紺のブレザーが岡ちゃんの一生の宝物です。

阪神大地震の時ほど岡ちゃんが青くなつたことはありません。

今度はタクシーで、という訳にいきません。瀬戸内海を小舟を乗り継いで神戸港の岸壁に立つた岡ちゃんは、ことごとく倒壊したクレーンの群れを見て言葉もありませんでした。それは『わが子の屍（しかばね）を見るような思い』でした。

着のみのまま、テントに寝泊りしてクレーンの修理にあたっていた時の岡ちゃんの姿は、それはまるで幽霊のようでした。

灯りの消えた神戸の町。ボランティアの青年からもらつたおにぎりは、噛むごとに涙がこみあげてきて、手のなかでグシャグシャになりました。

倒壊した神戸の街は敗戦直後の日本の街そのままでした。貧しかった頃、家族で分けあって食べたおにぎりのことを岡ちゃんは思い出しました。

みんなが明日を生きることには精一杯の時代でした。

生涯をクレーンの仕事にかけ、世界じゅうにクレーンを売り歩いて、外貨を稼いできたという誇りが岡ちゃんにはあります。

小麦や鉄鉱石を港で積み降ろすクレーンの勇姿は、岡ちゃんの生きがいです。

名も無いタクシーの運転手たちや、蟻のように働くクレーン工場の工員たちが、自分の仕事を橋脚のように支えてくれています。

ボランティアの青年の屈託のない笑顔のなかに、昔とは比べようもなく豊かになった日本を見たようでした。自分も少しだけこの豊かさを支えてきたのだと、岡ちゃんは思いました。

来年の春、岡ちゃんは停年退職の日を迎えます。

その時は東北の故郷に帰って、思い切り「北国の春」を歌おうと、岡ちゃんは考えています。

了

おじさんの青春日記 ～その3～

お好み焼き

『風月』

その年、自動車の保有台数は一千万台を突破し、日本の高度経済成長は爛熟期を迎えていました。しかし、泥沼状態のままのベトナム戦争が、日本の社会に暗い影を落としていた時でもありました。

昭和四二年（一九六七年）厳冬の北海道・札幌。

寒風で鼻先を赤くした一人の青年がわずかな荷物を肩に、市電の停留所「静修学園前」に降り立ちました。

日本の北の守りの最前線、陸上自衛隊北部方面隊に所属する二二歳の青年、二神（ふたがみ）敏郎は特別なあてもなくフラリとこの停留所に降りることにしたのです。

自衛隊の除隊を前に、広大な自然のなかに人間を懐（ふところ）深く包みこむような、北海道の魅力に離れがたいものを感じていた二神青年は、このさい果ての地に残って、除隊後も自分を試してみようと思っていました。

知人の結婚式といえは招待状も無しで、たとえ通りがかりの人であっても気軽に披露宴に出席するという、北海道人の大らかな気風も、身近に身寄りのない二神青年にとってはどこか心強いものでした。

大阪生まれの二神青年は高校を出るまで、大阪の「お好み焼き」を主食のようにして育ちました。

家族や仲のいい友達との団欒（だんらん）の真ん中には、いつもお好み焼きがありました。

熱い鉄板の上で焦げ付くソースの香りは青春の思い出と重なりあっています。

「もうちよつと粉（こな）かき混ぜんとあかんのとちやう？」

「ええねん、ええねん。あんまりかき混ぜると、糊（のり）みたいになりよるよつてな」

「もうそろそろ、ええで」

「まだやん。豚肉がもうちよつと焼けんとな。キャベツかてまだ固いんとちやうか？」

鉄板の上でジュージュー音をたてて焼き上がっていくお好み焼きを、額（ひたい）突き合わせてつつき合っていると、仲間との絆（きずな）はいつそう深いものになったように感じられました。

「あいつオレの仲間やねん」。

心からそう思える友達の顔が、焦げたソースの香りとともによみがえってきます。

二神青年は北海道でお好み焼きを見ることがほとんどないことを、かねてから不思議に思っていました。

良質の小麦粉、新鮮なエビやイカ、貝類。これほどの食材に恵まれながら、北海道では

サツポローメンの声名に隠れて、お好み焼きはほとんど顧（かえり）みられることはありませんでした。

昭和四二年（一九六七年）の二月。二神青年は市電「静修学園前」にわずか三坪ほどのお好み焼き店、「風月」を開店しました。

家賃九千円。六人も入れば満席という小さな店でした。技術もない、知人もない、金もない。無い無いづくしのスタートでした。

いちばん最初のお客様は近くに住む中学生でした。客商売をする者にとって、最初に訪ねてくれたお客様の姿は生涯忘れることがないといいます。

「緊張してしまっていて、そのお客様と何を話したか覚えていません」。

一日の売り上げはせいぜい二千円から三千円。朝から鉄板に火を入れてお客様を待って、その日の売り上げ五百円という時もありました。

もちろん一人で、深夜まで働いて、早朝は新聞配達をして稼ぎの足しにしました。汗を流してさえいればなんとかなる。汗が商売の成功を呼び込んでくれる。

二二歳の青年はそう信じていました。

近くの札幌南高校や静修女子高校の生徒が常連客になってくれました。

札幌南高校の生徒が昼休み、学校の塀を乗り越えてお好み焼きを食べにやってきました。もちろん学校では昼食の外食はご法度です。小さな店で換気も悪く、学生服に焼きそばやお好み焼きの匂いが染みついたまま学校に戻った生徒は、すぐに先生にバレて叱られてしまいました。

ほとぼりがさめた頃には、生徒がまた塀を乗り越えてやってきました。

二神青年は北海道生まれの生徒たちから、北海道の味の指南をつけました。

寒い地方には寒い地方特有の味が培（つちかわ）れているのです。

「おじさん、きょうの焼きそば、ちよつと甘いんじゃないの？」

「そーかあ？ きょうは朝ちよつと寝坊して、あわてて仕込みたさかい、ソースの加減

まちごうたんかもしれへんなあ」

「それに豚肉もいつもより量が少ないよ。味とポリウムが『風月』のセールスポイント

だからね。たのむよ、おじさん」

「すまん、すまん。今度は気をつけるよつてに」

食べざかりの彼らには、そば玉を倍にして皿に盛りました。

五つも六つも年下の高校生たちの助言を頼りに、北海道『風月』の味が徐々に出来上がっていきました。

『風月』を愛しつづけ、二神青年と一緒にになって味づくりに加わってくれた常連客、札幌南高校の田村君は学校が終えたあとにも店に立ち寄って、黙って店の後片付けを手伝ってくれ

ることがありました。もの静かで努力家の田村君は店の粗末な椅子に座って、一心に英語の辞書に向かうこともしばしばでした。

「おじさん、インディペンデントっていう言葉知ってる？」

「さあなあ、なんやろ？」

田村君のつぶやきに、鉄板を一生懸命磨く手を止めて、二神青年は顔を上げます。

「インディペンデント。独立した、自立した、何ものにも拘束されることなく、自分の責任で生きていく、という意味かなあ」

「ええ言葉やねえ。貧乏しとるけど、わしもインディペンデントやるか？」

「そうだね、おじさんの店は小さいけど、立派なインディペンデントだと思うよ。おじさんは偉いと思う」

高校生の田村君はおじさんが懸命に働く姿を間近に見て、父親からさえ教えられることになかった、大人達の厳しい現実を考えることがありました。

田村君はおじさんに見送られて南高を卒業し、慶応大学に進みました。

田村君といつも連れ立って「風月」を訪れ、学校から自宅へ帰るまでのひとときをじゃれ合う兄弟のよう過ごした、同じく南高の庄原君は田村君と共に上京し、早稲田大学へ。二神青年の開業直後の苦勞をつぶさに見てきた二人です。

かつての二神青年と同じように、彼らの高校生活の思い出は『風月』のお好み焼きの匂いとともにあります。

札幌南高校の卒業式の朝、二神青年は決まって店の前に立ち、巣立っていく生徒たちを最敬礼で見送りました。

生徒たちはまだ真冬のような北海道の春がくるたびに、卒業と入学を繰り返しましたが、まるで先輩からの申し送りでもあったように、変わらず『風月』の扉をにぎやかに開けてくれました。



開店当時の二神青年にとって、お好み焼き『風月』は風が吹かないと動かない、小さな帆掛け船のようでした。

荒波に揉まれながらも、お客様という風が日々々々、大きく吹いて、少しでも前に進むことができることを祈っていました。

『風月』という屋号の由来です。

温かい風がそよそよと『風月』の帆を後押ししてくれました。

開店して五年目。三倍の広さの店に移ることができました。屋台のような店から、内装も整った、やっと店舗らしい店の主になることができました。これでやっと、お客様に寒い店外で席が空くのを待ってもらうこともなくなりました。

開業後二十年ののち、『風月』は初めての支店を出すことができました。

数えきれない嵐をkarouうじて乗り越えて、『風月』は帆いっばいの風を受けて進みました。

二神青年はいつの間にか四十歳を過ぎていました。

初めての店を開く時に十萬円の資金を黙って渡してくれた大阪のお母さんは、

「ほうかー(そうかー)、ありがたいなー、感謝しいやー、不服いったらあかんでえ」

と会ったたびに息子の話を聞きながら励ましてくれました。

大阪のお好み焼きをベースに、北海道の新鮮なポタンエビや獲りたてのイカ、帆立貝を盛った「風月」のお好み焼きは北海道産だけでなく、内地からの観光客にもよろこばれる名物にまで育ちました。

一店、また一店と店は順調に増え続けました。

「社長、D社の田村社長さんとおっしゃる方からお電話です」

「D社？ 田村社長？」

電話の相手が二十五年前、札幌南高校を卒業した田村君と解るまで少しの時間がかかりました。

「おじさん、本当にご無沙汰しています。南高の田村です。」

陰ながらいつもよろこんでいます。すっかりご成功されて お会いしたくても敷居が高くて

「あの田村君ですか！ いやー、私こそ本当にごぶさたしています」

電話口でしばらく昔話に花が咲きました。

大学を卒業した田村君は北海道に帰って、北海道最大の酒類商社、H酒販に入社しました。豪快に大盛り焼きそばを平らげていた南高の庄原君も、昔そのままに仲良く田村君と同じH酒販に入社していました。

「近くにいるのにどうして今まで、電話くらいくれへんかったん？」

会社のバッジを胸におじさんに会いに行くと、成り行きで酒の売り込みになることを快く(こころよ)しとしない二人は、今日までおじさんに会いに行くことをためらっていたのです。

田村君は今ではH酒販で飲食部門を担当する子会社の社長。色白の高校時代の面影はすっかり残っていますが、頭には何本かの白髪が交じっています。

長く会うことのなかった間、二神青年にも田村君にも同じ数だけの北海道の厳しい冬が訪れていました。

二人で話していると、開業直後の狭い店で鉄板をはさんで向かい合っていた頃に、そのま戻ってしまいそうでした。

札幌市内にあるデパートでワインやリキュールのバーを経営する田村君の会社は、酒だけの店から、子供達にも受けいれられる食事も提供できる店に転換したいと考えていました。やっぱり「お好み焼き」や「焼きそば」しかないと考えた田村君に、あの頃の『風月』の香りとともにおじさんの笑顔がよみがえってきました。

三十年近く前、おじさんが作ってくれた風月のお好み焼きは、今ではすっかり北海道を代表する味にまで育ちました。

かつて、学生服姿の田村君たちに冷やかされながら、汗をかきかき試行錯誤を繰り返した二神青年は、田村君の新規事業のために三十年の汗と引き替えに手に入れた無数の経営ノウハウを、田村君の店に惜しむことなくそそぎ込みました。

二神青年の頭のなかには、長いあいだ体で憶えた商売の手順が数百、数千の引き出しに整然と納まつていて、戸惑う田村君の前に手品のように次々に取り出します。

開店前後、あれほど苦しみ抜いた起業の苦悩は過去のものになってしまい、田村君と共同で進める開店作業は、二神青年にとって遠いあの頃にもどったような、実に楽しい作業になりました。

商社での仕事を終えたのちコツコツとお酒の勉強をして、今ではソムリエの資格をもつまでになった田村君は、今も時折ヨーロッパにまで出かけてワイン醸造の研究を続けています。

ブドウ畑の土の色を見ただけで、その土地で採れるぶどう酒の味を予言できるほどの田村君は、北海道の滋養をたっぷり吸収し、清澄な空気のおかげでじっくりと熟成されたワインやウイスキー、ホップの効いた生ビールを北海道の誇りと思っています。この土地で生まれ、死ぬことを、歎びと思っています。

東北地方と北陸地方を合わせた面積に匹敵する広大な大地に、明治維新の頃の北海道の人口は原住アイヌ人を含めてわずかに十万人。

本格的な開拓が始まって百年余の歴史しか持たない北海道は、内地や外国からもたらされた様々な文化が混交しています。

独立共和国・北海道を夢見た幕末の武士、榎本武揚（えのもとたけあき）のように、北海道は再出発を目指す移住者たちの夢を実現する、国内唯一の壮大な処女地でもありました。

未開の地を開墾し、沃土（よくだ）に変えることを夢見て津軽海峡を渡った農夫たち。豊かな自然の産物を求めて、ヒグマの棲む奥地にまで分け入った商人たち。

新天地の人々と安息を共にすることを願って、ヨーロッパやアメリカから大海を越えてやってきた宣教師たち。ロシアからの居留民たち。そしてその子孫たち。

北海道は志（こころざし）ある者すべてを過去のしがらみから解き放って、頓着なく受け容れ、育ててくれる不思議な豊かさをもっているようです。

大阪に生まれ、北海道に育てられた二神青年、そして田村君。

二十五年ぶりの二人の再会が、北海道の食の歴史に新しい一ページを創り出していくような予感がします。

株式会社「風月」は創業三十周年を迎えました。代表取締役社長、二神（ふたがみ）敏郎は北海道全土に二十二店舗を擁する外食事業の経営者となりました。

「お好み焼き」ひとすじに、愛する北海道の大地にしっかりと根をおろすことだけを、ひたすら思い続けた三十年でした。

きょうも二神青年は白い調理師帽と前掛け姿で、毎日店頭に立ってお客様を出迎えます。
この春も、『風月』札幌駅店の店頭到手書きの掲示が掲げられました。

「 蛍の光 窓の雪

卒業生のみなさん

永いあいだ『風月』のご利用ありがとうございました。

毎年、このように書き続けて三十年。私ども創業の年、
昭和四二年の卒業生の方も四八歳になります。

『基を忘れず』の言葉どおり、今日まで育てていただいた、
そして今もご愛顧いただいている学生さんには、ただただ感謝
の言葉しかありません。

ご卒業後も『風月』の各店、未長くごひいきいただければ幸いです。
『念ずれば花ひらく』 いつまでも青春でいてください。

一九九七年 春

「 風月 店主

了